

喜びで満ちあふれる生活の秘訣

ヨハネ福音書15:7-11

【新改訳 2017】

15:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。

15:8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになります。

15:9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛にとどまりなさい。

15:10 わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。

15:11 わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。

【祈りながら考えよう】

- (1) 7節によれば、祈りがかなえられる条件は何ですか。
- (2) 9節によれば、主が私たちが愛している愛はどの程度の愛ですか。
- (3) 10節によれば、「主の愛にとどまる」ことは、具体的にどういうことですか。

【解説】

(1) 祈りがかなえられる条件

主が、「何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」と語られた時、無条件で、私たちがほしいものを何でも片っ端から祈れば答えてくださるのかと言うと、そうではない。そこには「条件」が示されている。その条件はこうである。



「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら」である。この条件さえ整っていれば、主は私たちの祈りに答えてくださると言われた。

この「条件」を見ていきたい。「あなたがたがわたしにとどまり」に続いて語られた。主はさらに、「わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら」と言われた。「わたしのことば」とは、「聖書の言葉」であり、「そこに示されているキリストの御心」のことである。

キリストとの親しい交わりを通して、「キリストの御心」が本当によく私たちに分かっているなら、私たちは必ず御心になかった祈りをするはずで、御心になかった祈りは、必ず答えられる。次のように教えられている通りである。

「何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。」(Iヨハネ5:14-15)

そういうわけで、私たちは毎日、主との交わりを何よりも第1のこととしたいと思う。その祈りは私たちの内におられる御霊の祈りでもある(ロマ8:26)。

(2) 父が栄光をお受けになる

あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになります。(8節)

神の子らが、実を結び、キリストに似た姿をこの世に示す時、父は栄光をお受けになる。これほど「ひどい罪人」をこれほど「信仰深い聖徒に変える」というのは、偉大な神でなければできないことだ、と人々は告白せざるを得なくなる。

「あなたがたが……わたしの弟子となる」これは、主にとどまり続ける時、私たちが主の弟子であると認められるという意味である。

(3) 父が御子を愛されたように愛されている

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛にとどまりなさい。(9節)

父なる神が御子イエス様を愛されたように、イエス様も弟子たちを愛された。どれくらい愛されたのでしょうか。

13章1節には、「最後まで愛された」とある。最後まで、余すところなく、とことん愛されました。

イエス様の愛は、途中で放棄するような愛ではない。私たちの愛はそういうところがある。少しでも損をしたらすぐに止めてしまう。損得勘定の愛である。手のひらを返すように、すぐに裏切ってしまうことがある。

しかし、神の愛は決して変わることがない。神はこの愛を十字架によって表してくださった。主は、ご自分のいのちを与えるほど、私たちが愛してくださったのである。

新聖歌483番に「両手いっぱい愛」という賛美がある。

「①ある日イエス様に 聞いてみたんだ どれくらいぼくを 愛しているの? これくらいかな?

これくらいかな? イエス様は黙って ほほえんでる」

「②もう一度イエス様に 聞いてみたんだ どれくらいぼくを 愛しているの? これくらいかな?

これくらいかな? イエス様は優しく ほほえんでる」

「③ある日イエス様は 答えてくれた 静かに両手を広げて その手のひらに 釘を打たれて

十字架にかかってくださった それは ぼくの罪のため ごめんねありがとう イエス様

それはぼくの罪のため ごめんねありがとう イエス様 ごめんねありがとう イエス様」

この歌は、イエス様がどれほど私たちが愛してくださったかを歌った歌である。それは、その手のひらに釘を打たれ、十字架にかかって死んでくださったほどである。それほどまでに愛してくださった。

9節には、「わたしの愛にとどまりなさい」とある。これは、主の愛を絶えず心に覚え、それを喜び楽しみ続ける、という意味である。

(5) 主の愛にとどまるには

では「主の愛にとどまる」とはどういうことなのか。

10節には、「わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。」とある。

この10節の前半は、完全な模範であるお方を私たちに提示している。主イエスは「父の戒め」を守られた。主がなされたことのどれをとっても、それは父なる神のみこころに従ってなされたものであった。主は常に御父の愛を喜び楽しまれた。そのすばらしい愛の交わりが損なわれることは決してなかった。

10節の後半は、私たちがどうしたら主の愛の中にとどまることができるのかを教えている。それは「主の戒め」を守ることによる。もし、私たちが主の戒めを守るなら、キリストの愛にとどまることになる。その愛とは、主の戒めを守ることによって具体化されるということである。

「主の戒め」とは何か。それは広い意味ではキリストのことば、神のことば全体を指しているが、この文脈では、互いに愛し合うということを指している。それは、13章34-35節で、イエス様が弟子たちに与えた新しい戒めである。

「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」

(6) 喜びで満ちあふれるようになるため

以上のことを語られた理由と目的を、主は説明して、こう言われた。

わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。(11節)

この11節で「これらのこと」とは何か。それは1-10節までのところで語られたことである。主がこれらのことを話された目的がここにある。

それは、「わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるため」である。

使徒パウロはピリピ4章4節で、「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」と言っている。いつも喜ぶなんて無理だ、不可能だと思われるだろうか。

しかし、パウロはいつも喜ぶことができた人である。それは、彼が主にとどまり、主の戒めにとどまっていたので、主の喜びが与えられていたのである。パウロは、「あらゆる境遇に対処する秘訣」(ピリピ4:11-13)を心得ていた。それは何か。「イエス・キリストにとどまること」である。

それは私たちが同じである。私たちの人生にはいろいろな事が起こる。良いことばかりではなく、悪いと思えることも起こる。しかし、それがどんなことであっても、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできない(ロマ8:39)。

私たちがキリストにとどまるなら、喜びで満ち溢れるようになる。確かに、現実には厳しいものがあるが、その中であっても、神が私たちにいのちと力を与え、多くの実を結ぶことができるようにしてくださるからである。